

川村家—アイヌ文化を未来へ継承する

19 世紀後半まで、旭川地域のアイヌは石狩川沿いの集落で暮らしていました。20 世紀初頭に旭川が発展するにつれ、彼らの土地は政府により接収され、これらの集落に住んでいた人々は、幾度も移住を強いられました。川村カ子ト記念アイヌ民族資料館は、かつてチカブニコタン（現在の旭川市の中心部付近）と呼ばれた集落の一部だった土地に建っています。

1916 年、チカブニコタンの村長であった川村イタキシロマ（?-1943 年）は、自宅の隣に小さな博物館を建設しました。彼の使命は、アイヌ文化を保存し、訪れる和人（民族的日本人）の間に広がる一般的な誤解を正すことでした。

イタキシロマの息子であるカ子ト（1893 -1977）は、1944 年に父の後を継いで館長となりました。カ子トは舞踊の公演や「イオマンテ」（熊の神々を送る儀式）などの儀式を含むイベントを通じて、旭川でアイヌ文化の振興に努めました。1964 年には旭川で北海道アイヌ民族祭を主催し、この 5 日間の祭りには北海道各地から 500 人以上のアイヌが参加しました。参加者たちは伝統的な儀式や慰霊祭、ストーリーテリングの競技会、木彫りのコンテスト、そしてアイヌ文化に関する会議に参加しました。

カ子トは博物館を引き継ぐ前は鉄道測量士でした。彼は在職中、北海道、長野、樺太、そ

して韓国で働きました。当時の記録によると、アイヌに対する差別により、彼には和人の同僚の半分の給料しか支払われなかったとされています。そのような状況にもかかわらず、館長になった時には博物館を拡張するのに十分な資金を貯めていました。

カ子トの活動は文化保存にとどまりませんでした。彼は、伝統的な習慣や知識を維持し共有できる場として博物館を位置づけることで、アイヌのアイデンティティと権利を主張する上で重要な役割を果たしました。彼の活動は子孫たちによって継承され、特に三代目館長となった息子の兼一（1952-2021）によって引き継がれました。兼一は地域のボランティアとともに博

物館の敷地内に伝統的なアイヌの家屋（チセ）を建て、アイヌと地域社会の他のメンバーとの協力関係を育みました。アイヌ語教室を開催し、ハワイやアメリカの他の地域、カナダ、台湾など、日本国外の先住民との交流を組織しました。

兼一の息子である晴道（1999年生まれ）は、父の死後、博物館の館長を引き継ぎました。彼は植物の採取や調理法の実演、木彫り、そして1998年に父が創設した年次の旭川アイヌ文化フェスティバルの継続など、父の活動を引き継いでいます。